

キミヤの成長物語—河崎秋子『肉弾』論—

*
小田島 本有

Motoari ODAJIMA

A growth story of Kimiya—A study of Kawasaki Akiko『肉弾』—

一

河崎秋子にとって、『肉弾』(二〇一七年)は三浦綾子文学賞受賞作品『颯風の王』(二〇一五年)に続く、単行本としては二作目の作品である。なお、この作品は二〇一九年に大藪春彦賞を受賞した。いまや河崎は桜木紫乃に続く道東出身の作家として注目される存在となっている。

『颯風の王』は北海道に渡ってきた一族と馬との関わりを明治から平成にかけて描いた作品であるが、とりわけミネが飢餓のなか馬のアオの肉を食する場面の圧倒的な描写に心揺さぶられた読者は少なくなかった。『肉弾』では人間と熊との格闘場面が作品中のクライマックスとなっている。その一方で野生化した犬達が主人公と共に熊に立ち向かっていくくんだりも圧巻である。別海町で酪農業を営む家に生まれ、本人も家業を助ける傍ら羊飼いとして働く一方で執筆活動が続けてきたことはつとに知られている。動物たちと毎日触れ合い、その生き死にを目の当たりにしている彼女だからこそこのような描写が可能になったのであろう(なお、河崎は二〇一九年いっばいを区切りとして、実家を離れて作家一本の生活始める決心をした)。

今回の論考は『肉弾』を主人公キミヤ(沢貴美也)の成長物語として捉えることを主眼としている。その際に父親(沢龍一郎)との関係のあり方、さらにはキミヤの父親に対する認識の変化が重要なカギとなってくる。作品中でこの父親は熊に殺される。その一件がキミヤの大きな成長を促す出来事となったであろうことは改めて断るまでもない。いわば「父親殺し」の役割を結果的には熊が果たすことになるのだ。

その一方で、この作品は人間と動物との共生のあり方を提起している。後述するが、動物の視点による章段が十三のうち六つを占めている点は特筆すべきであろう。

二

父親の沢龍一郎は三度の離婚をしている。建設会社を経営し、ワンマンなところはあるものの最後は自ら尻拭いをして徹夜もする潔さもあってか、社員の退職率が意外と低い。そこではこの社長に対する社員の信頼が一定程度あったことを伺わせる。ただ、女癖と酒癖の悪さが玉に瑕である。

作品の中では父親の結婚歴がこのように語られている。

キミヤには母親が通算三人いたことになる。一人目はキミヤの生母。彼女はキミヤが幼稚園入園前に家を出て行った。そのため記憶はほとんどないし、写真は一切切父が廃棄してしまつたらしく、まさに顔も知らない。知っているのは、長距離が得意だったらしいということだけ。

その後すぐに二番目の母が家に入り、折り合いこそ悪くなかったが、家族とはほど遠い距離感を保ち、結局馴染みがないまま五年前に出て行った。

父親が再再婚したのはキミヤが高校に入学する直前のことだった。三番目の母親は事前になんの説明もなく、父に伴われて突然家に現れた。

キミヤとは年齢が十歳ほどしか離れておらず、当初、お互いによそよそしく過ごしていた。家族という実感は薄かった。相手もたぶんそう思っていただろうと考えている。

(孤走)

最初の二人の母親は自ら家を出ている。これはおそらく彼女たちが夫に愛想を尽かしたからに他ならない。三番目の母親に至っては突然キミヤの前に現れているし、もともと水商売をやっていた若い女性であることを考えてもこの結婚が父親の熟慮の末の結果であったとは到底言い難い。しかもこの彼女はキミヤが大学合格を決めたときに、(進学祝い)と称してキミヤを誘惑し身体の関係を持つとすらしめた。この時はその現場を父親に見えられられてもいる。

このとき父親が殴ったのは若い妻の方だけであった。キミヤも殴られることを覚悟したが殴られない。キミヤがそのことで安堵したわけでもない。キミヤは義母も自分も屑であると認識している。だがその一方で義母を殴った父親に「下劣さと恐ろしさ」を感じてもいた。なぜ自分だけが殴られなかったのか、キミヤには不審だけが残ることになったのである。

この時の父親には一種の負い目があったのではないか。それは今まで息子にきちんと母親の存在を味あわせてやれなかったという思いである。だからといってただ母の座に女を据えれば済むという単純な話ではない。三度目の妻に至っては、事もあろうにキミヤに対して「母」としてではなく「女」として迫ることをした。そもそもその醜悪な事態を生む原因は父親本人にあった。その妻は息子と十年しか違わなかったばかりか、日頃から「軽薄さ」「馴れ馴れしさ」があり、それは客商売で培われたものである。それを承知の上で父親は息子の意向に関係なく半ば強引に結婚したのだ。その結果、息子と妻が危うく関係を持つ一歩寸前までいったのである。だからといって息子を殴れるほど、自分は胸を張れるわけではなかった。自分の三度目の結婚そのものがいかにいい加減なものであったか、彼はしただか痛感させられたのである。

一方のキミヤは「父が恐ろしくて憎い。そしてその父を超えられることなどない」「(孤走)」というアンビバレントな感情を抱いていた。いつも自分を父親と対比し、自分を「欠けた存在」と貶める。父親を人間として尊敬しているわけではないものの、彼は自らを「劣化コピー」とまで卑下した。ここから成長の契機が伺えないのは明らかである。彼はいわば自己を貶めることで自らの成長の可能

性を封じ込めていたのだった。

三

キミヤと父親との関係の変化を考える際に、少なくとも二つのターニングポイントがあった。

一つは、キミヤが高校最後の年、駅伝会場に向かう途中で起こった交通事故である。父親が息子を乗せて運転した際、前の車が急停車したため追突事故となった。幸い大事に至らなかったこともあり、キミヤは警察を待つ父親の制止を振り切って会場に向かい、事故のことは顧問や部員には一切告げず大会に出場した。ところが走っている途中に筋線維断裂を起こし転倒して気を失い、結局はチーム全体に迷惑をかけることになった。この一件でキミヤは顧問や部員たちの信用を失ったため退部を余儀なくされたのである。これ以後キミヤは無気力となり、大学も入れそうなどころに入って惰性的な生活を続けた末休学する。父親ともキミヤは心理的な距離を置こうとしていた。

事故から二年後、摩周湖のカルデラの底で焚火を見つめていたとき、「あのことは、悪いと思ってる」と、父親はだしぬけにぼそりと呟いている。この言葉からも、父親が事故について気にかけていたことが伺える。ずっと胸に秘めていたものが思わず漏れてしまったわけだが、そもそも事故そのものは父親に責任があったわけではない。「大会のためだったからって、部活ひとつやめたからって、別に死ぬわけじゃねえんだし。なっ、そう気にするなって」と肩に置く父親の手を振りほどき、思わず「気にするに決まってるだろ！ だいたい、事故だって誰のせいだと思ってるんだ！」とキミヤは叫んでいた(不帰の淵)。このように自分の無気力の責任を彼は父親に転嫁していたのである。

大学入学後、この父親はキミヤに銃砲所持許可と狩猟免許の取得を半ば強引に勧め実現させていた。これも無気力状態になっている息子を何とか変えたいという父親なりのやり方であったのだ。父親はもともとから狩猟を趣味としており、そのためしばしば北海道を訪れてもいた。

もう一つのターニングポイントは父親が熊に襲われ殺害されたことである。この作品はキミヤが父親とともに釧路空港に降り立ったところから始められるが、その目的は狩猟の好きな父親が息子を伴って鹿撃ちをすることだった。キミヤは

父親に無理やり連れてこられた格好である。しかもこの父親は定宿で熊の情報を得たことで、その目的を熊狙いに変更した。そして本来は立ち入り禁止区域である摩周湖のカルデラの底にキミヤを連れ込んだのである。全てが父親のペースであり、キミヤにとって父親は迷惑な存在だった。このときキミヤは父親に殺意すら覚えている。

キミヤは銃を握り直した。父親は右前方に注意を払っていて、真後ろの自分は視界に入っていないはずだ。銃身を両手で支え、引き金には触れないままで、銃をゆっくりと無防備な背中へと向ける。

手が震えていた。銃口もそれにつられてせわしなく動く。しかし至近距離にある父親の背中からは外れない。手は震えているのに、奇妙な安堵があった。このまま引き金を指をかけて、少しだけ力を入れれば、全てが終わってくれる。

キミヤのこめかみを脂汗が流れる。銃ならば父親の方が力があるうが関係ない。この便利な道具に全てを託して、事故だったと後からいくらでも逃げ道を作れるやり方で、こんなにも簡単にこの男を殺せる。気づいてしまった可能性の恐ろしさと魅力に、背筋が勝手にぶるりと震えた。 (「不帰の淵」)

熊が二人の前に現れるのはこの直後である。それがなければキミヤが父親を撃つ可能性は決して低くなかったのだ。だが、熊になぎ倒されたことによって、キミヤの殺意は一気に雲散霧消した。父親はライフルを発砲するが銃弾はぶれにぶれ熊に当たらない。逆に父親はキミヤの眼の前で熊の餌食となってしまう。

父親が熊に襲われやがて動かなくなったとき、キミヤの眼の前で今度は犬数頭が現れて熊に立ち向かう光景が現出する。このとき当惑するキミヤの左の二の腕に噛みつく小型犬が現れるのだが、それがピンクの首輪をつけたチワワだった。それだけでも驚きなのに、さらに中型の犬までもキミヤに襲いかかってくる。混乱したキミヤは犬たちが再び熊に立ち向かおうとしているその隙に、銃を持たずにその場から逃げ出したのだが、その場にいた犬達の何頭かは首輪をつけていたことだけはキミヤの記憶に確かに残ったのである。

一人取り残され、しかも遭難したことさえ知られない中ただ飢えて衰弱していくか、あるいは熊か犬に捕まるかしない状況を思ったとき、キミヤには恐怖が襲

った。そして前途に望みを失った彼は自殺を思い、持っていたナイフでの自殺を試みようとした。そのとき彼の眼の前に現れたのが中型犬である。中型犬はキミヤの右ふくらはぎに噛みつく。思わず抵抗したことが彼の意識を変えた。犬が立ち去った後で彼はズボンを脱いで確認をし、「良かった……足、無事だった」(「翻意」)と安堵している。彼は高校時代駅伝の選手であり、足を気遣うことは半ば習慣になっていた。ふくらはぎは彼にとって誇りそのものだったのかもしれない。興味深いのはこの後、キミヤの口から「冗談じゃない。冗談じゃないぞ……」という言葉が思わず発せられていることである。

「絶対に嫌だ。こんな所で……」

諦めてしまう自分を許せるものか。自分の肉体が存在することを、自分が肯定しなくてどうする。死ぬまでは勝手に動く心臓を、自分が自分の都合で勝手に止める権利などあるものか。(略) 手にしている、今自分の命を消そうとしたナイフを睨んでいた。眼圧で頭が痛い。こんなもんで死ぬんなら、俺の命はこの程度の命だったってことになる。冗談じゃない。 (「翻意」)

犬にふくらはぎを噛まれたときの痛みがキミヤに覚醒を促したのである。自殺願望は一気に吹き飛んだ。そして「どうせ死ぬなら、死に物狂いで死んでやる。リタイアなんて金輪際ご免だ」と自ら宣言するに至るのである。彼はいわば開き直ったのだ。

四

ところで、『肉弾』は全部で十三の章段から構成されている。

狩場へ

謝肉

不帰の淵

○ 名を欠いた者

孤走

○ 不死犬

翻意

○ あいくるしく

△ 純化

悪神囃う

フラット

○ サバイバー

▽ 狗命尽きず

上に「○」の付いているのは熊や犬など、動物の視点で書かれた章段であり、「△」の付いている「純化」は動物の視点から人間の視点へと転換が見られる章段、逆に「▽」の付いた「狗命尽きず」は人間の視点から動物の視点への転換が見られる章段である。このように河崎はこの作品において、殊更動物の視点を取り入れている。

「名を欠いた者」ではピレネー犬、「不死犬」ではラウダと名づけられたオオカミ犬、「あいくるしく」ではオードリーという名のチワワが登場する。いずれも元々は人間に飼われていた犬達であるが、どちらも人間の勝手な都合で捨てられたり、自ら逃げだしたりした経歴を持っている。きちんとした躰を怠った結果近隣の騒動を買ったため飼い主が持て余したり、あまりの過保護に犬じたいが耐えきれなくなったりするなど、ケースはさまざまであるが、作者はこれらの事例を実に丹念に描いている。いい加減な飼い方をする人間たちのあり方を彼女は静かに訴え、人間と動物との共生のあり方を問いかけている。対象は飼い犬ばかりではない。人間が自分たちの便利さを優先するあまり生態系にも変化を及ぼし、その影響を鹿や熊までが被っている現実を作者はしっかりと捉えている。

ここで注目したいのは、犬の視点から人間の視点に転換する「純化」の記述である。

グルル、とハスキーの喉の奥から声がせり上がって、それを合図にしたように人間が声を出した。

「来たな。お犬様たち」

人間は発語する。犬達はその子細な意味を理解しない。しないまでも、その

ゆっくりと低い声の奥から、静かな怒りを探知する。単純に飛びつくつもりが勢いを削がれて怒りは燻り、犬達は警戒の姿勢のまま後ずさりした。

「火って生き物みんな怖がるかと最初思ってたけど。考えてみるとお前たち、飼いだか元・飼いだつばいよな」

キミヤは長い棒をぼんぼんともう片方の手で叩きながら、その場から立ち上がった。あえて言葉を口に出して、犬に語りかける。

(「純化」、傍線部・小田島)

この二つの傍線部の間で主語が「人間」から「キミヤ」に変化している。「人間は発語する」の一文は明らかに犬達の視点に立った記述である。我々読者は言うまでもなく人間なのでキミヤの言葉は理解できる。だが犬達にはそれは不可能だ。だが彼らはこの人間の「ゆっくりと低い声」から「静かな怒り」を敏感に察し、警戒感を強めている。

彼らがキミヤを見るのはこれが初めてではない。だが前回はまだ怯えて逃げるだけの弱々しい印象しか彼等には与えていなかった。だが、キミヤは前述したように、「冗談じゃない」「どうせ死ぬなら、死に物狂いで死んでやる」と明確に生きる意志を持った。そして飼い犬が多かったことを思い出し、焚火をして彼らをおびき寄せようと作戦を立てる。「でも徒党組んでワンワン吠えられて、ハイすんませんってんじや、俺の、人間としての沽券をやつが成り立たないからさ」と言葉を解さない犬達に語りかけ、銃を失ったため長い棒だけで対抗しようとするキミヤには、以前の脆弱な面影は見られない。一対八という絶対的な不利を承知の上で敢えて戦うことも辞さないキミヤの姿には、ふてぶてしささえ生まれていた。

そしてキミヤは犬達と向き合うのだが、中でもハスキー系の犬に凄みを感じる。それが犬達のボスだった。キミヤはこの犬と対したとき、「心の半分は怖くて堪らないのに、どこかで熊に食い殺されるのならこのきれいな犬に仕留められる方がましかもしれない」などと思つた。それほどこの犬の威圧感に吸い寄せられるほど、この犬を好敵手と彼は認めたのであった。この犬はラウダという名前の雌だった。飼い主が十分な躰を怠ったため大きくなってからは手に負えず、腹を立てた飼い主が腹を蹴って子宮を損傷させた。これがきっかけでラウダは家を離れ痛みと高熱に苛まれる。それを救ったのがピレネー犬だった。ピレネー犬が肉を

運び続けたことでラウダは救われた。そして年老いたピレネーは死に、やがてラウダのもとに野生化した犬達が集まり、彼女はそのボスとなる。その経緯をキミヤが知るはずもない。

キミヤは戦いの中でこのボスの首にかぶりつき、屈服させた。首を咬まれたボスは抵抗せず、それを見た他の犬達も反撃をしない。このようにしてキミヤは彼らの仲間になったのである。このボスには首輪が付けられており、金属のプレートには「LAUDA」と書かれてあった。キミヤが「ラウダ？」と呼んだことで、ボスは返事をした。ラウダは久しぶりに自分の名前を呼ばれ記憶が甦ったのである。それまでの敵対関係が一気に氷解した瞬間だった。そして彼等は共同して巨大な熊と戦うことになるのである。

五

キミヤが犬達と共に熊と戦った際、決め手となったのはナイフを突き出してキミヤが下にいる熊を目掛けて木から落下したことだった。これは一か八かの賭けであった。これ自体はうまく熊を捕らえられたわけではない。キミヤが木に登る際に足場になっていた棒が、落下によつて熊の身体を深々と貫いたことが致命傷となった。このようにしてキミヤは銃を使わずに熊を退治した。作品のタイトルが〈肉弾〉である所以がここにある。

いずれにせよ熊は絶命し、キミヤは熊の皮を裂き、内臓を摘出する作業を始める。これは数日前、彼が父親から教わったばかりの作業だった。そのときは鹿の解体だったが、ここでは熊が相手であったためその作業は三時間あまりもかかったのである。

手を入れ、ひと塊、肝臓と思しき塊を切り取った。焚火に照らされて赤黒く光り、まだ脈打ちそうに温かいそれを前に、キミヤは大きな呼吸をする。吸い、吐き、それを三度繰り返し返して、手にしていた肝臓にかぶりついた。

予想に反して、歯ごたえがあった。料理屋や焼肉屋で出されるようなぶよぶよと柔らかい組織ではない。さくさくとした噛みごたえがあり、想像していたよりも血なまぐさくはない。これまで食べたどんな肉ともかけ離れた、生き物そのものの味だった。

（「狗命尽きず」）

熊はキミヤの父親の肉を食べている。そのことを踏まえると、ここは象徴的な場面と言えよう。キミヤはこのとき「生き物そのものの味」を感じ取っている。

この場面については、既に作品中で伏線が張られていた。それは「謝肉」で宿のオーナーが語っていた、この土地にかつて住んでいた人々の過酷なサバイバルの話である。この集落は貧しく、絶えず人々は腹を空かしていた。ここに住む若夫婦が外で農作業をしている最中に、飼っていた豚が家の籠の中にいた赤ん坊を食べるといふ事件が起こった。まもなく豚は発見され、村人達の見守るなか豚は処分された。その日の晩に赤ん坊を殺された若夫婦が訪れ、豚肉の塊を差し出した。「これを食べ。家族の誰ひとり漏らさず食べ」「これこそが弔いだ」という無言の圧力を老人は感じ取った。翌日、老人と息子が畑仕事を終えて帰宅すると、室内には美味そうな匂いが漂っている。子供達がいつも腹を空かしているし、肉が腐ってしまうと判断した息子の嫁がその肉を使つての鍋料理を用意していた。食卓では事情を知らずに喜んで食べる子供達と、事情を知る複雑な思いの大人達との対比が浮き彫りにされる。このとき老人は外に出て、家々の煙突から出る煙を「歪んだ煙」と感じていた。

自分達は人の道を外していないか、という疑問を抱き始めた老人は自ら家を出て山の中に入りそのまま姿を消したという。残された家族や集落の人々も老人を探すことはしなかった。いわば『檜山節考』の世界の再現である。実はこの姿を消した老人が、宿のオーナーの曾祖父にあたる人であった。

かつて中世ヨーロッパなどでは動物裁判というものが行われていた。人間に危害を加えるなどした動物の法的責任を裁判で問い、判決を下して処罰するのである。この集落で豚に下された処罰はこれに近いものと言える。豚の殺害に関与した若夫婦がその肉を近所の家庭に配った真意は容易には測りがたいが、考えられることとしてそれが亡くなった赤ん坊の供養という意味合いがあったのかもしれない。あるいはこの集落したいが貧しい生活を強いられていて腹を絶えず空かせていたという事情も考えられる。

この豚は赤ん坊を食べていた。そのことを知るがゆえに、例えば老人などはこの豚の肉を自分が食べた事実におののくのである。たとえ腹を空かせていたという事情はあったにせよである。

この種のテーマはしばしば文学作品でしばしば取り上げられていた。例えば有

名などころでは、人肉食を扱った大岡昇平『野火』や武田泰淳『ひかりごけ』などが思い浮かぶ。河崎自身も実質的なデビュー作となった『颯風の王』の中で、人間が生きた馬の肉を切り取って食べる場面を描いていた。いずれも飢餓状態に置かれた人間の食のあり方が問われている。『肉弾』の場合はこれらとは多少異なるところがあるものの、人間の倫理のあり方が根本から問われている点は共通する。

キミヤにとって、父の肉を食った熊の肝臓を取り出してかぶりついたという事実、父を受け入れるという意味において、激かな供養の儀式だったのかもしれない。

キミヤは父の遺体に向かって熊退治の報告をする。

あれだけ心の中で責め、悪態をつき、よそよそしい態度で距離をとっていた父に、こうなってみると懺悔のような言葉しか出ない自分はやはり息子なんだと今にして思い知る。

「なんとかさ。やり遂げたよ。ボロボロだけど、できた」

キミヤは白黒犬達にやったのと同じように、熊の肉を父親の地面へと置いた。そして傍らにしゃがんで合掌する。泣くつもりなどなかったのに、閉じた目から涙が次から次へと溢れ、鼻水も流れ、キミヤは手を合わせたままで落涙した。「結局……馬鹿親父なんじゃないか……。ちゃんと全部見といてくれりゃ良かったのにさ」

嗚咽を繰り返しながら、父親の遺体を拳で叩きそうになった。損傷した遺体にあんまりだ、と頭の隅で思い、せめて残っている方の腕を両手で握る。死後硬直で硬い筋肉は太く、骨もしっかりしていて、キミヤの腕よりもよほど太い。「この腕よりもさ。俺の細い腕がなんとか熊倒したとこ、なんで見てないんだよ……」

（「狗命尽きず」）

キミヤはそれまで父親に反発を覚え、心理的な距離を取ってきた。よそよそしい態度はその端的な表れである。だが、彼はここで熊を倒す場面を見てもらいたかったことを洩らしている。彼は父親に認めてもらいたかったのである。彼には承認願望があった。そしてこのとき、彼は自分がこの父親の息子であることを自覚した。そのことは即ち、彼が現実を素直に受け入れられるようになったことを

示すものであり、それは彼の成長の証でもあった。それまで父親に疎遠な態度を取り続けていたことが大人げない行為であったことも、彼は気づかされたのかもしれない。キミヤがうつ伏せになって慟哭するのはこの直後である。

六

ところで、『肉弾』はキミヤが夢を見ている場面から語り出されていた。

キミヤは夢を見ていた。薄暗い、同じような部屋ばかりが続く建物で、一人で何から逃げている。追ってくる者の姿は見えない。追いつかれたらどんな事が起こるのかなんて分からない。ただひたすら、見えないものに怯えて逃げ続ける。

後ろを振り返り振り返り、次の部屋また次の部屋と逃げながら、キミヤは自分が今、夢の中にいるのだと思っている。前夜やったホラーゲームの影響なのだとも理解している。ほら、その緑色のソファ、ゲームに出てきたやつと同じだ。部屋の照明も画面の暗さそのままだ。

そこまで分かっているながら、追われて逃げる焦燥感だけは妙にリアルで、背中を冷たい汗が流れる。身体が恐怖を感じ取っている。何かひどいことが起きそうな予感がする。どこか安全な場所に駆け込みたいと思う。早く。今すぐに。絶対に安心できる場所へと。

（「狩場へ」）

これはキミヤが降下中の飛行機の中で見ていた夢の記述である。この直後彼は父親に起こされるのだが、この夢で注目すべきはキミヤが何かに追われて逃げており、そのことに恐怖を感じ、「何かひどいことが起きそうな予感」に捉われていることである。これは後に熊と出会い、さらに犬達に襲われる展開を予兆する場面と言えよう。

『肉弾』では、ここを含め、キミヤが夢を見る場面が三つ描かれている。

二つ目は「不埒の淵」で描かれたもので、キミヤは森の中で倒れている。これは前日オーナーが話していたことが影響しており、キミヤは山の中に消えた老人になっている。ただ一つの気がかりは息子夫婦と孫のこと。彼らが北海道を離れ故郷に戻ってくれることをキミヤは願っている。その一方で、落ち葉が自分の体

に積み重なっていくなか「これでいい」と納得して微笑するキミヤがいる。

三つ目の夢では、キミヤは木々の下、老人の死体になっている。そしてその亡骸をカラスやキツネ、さらには犬達もやって来て啄む。遺体は完全に捕食され、ただ一本の大腿骨が残された（「フラット」）。この大腿骨はラウダが宝物として大切に持っているのを目にしたことが反映されているようだ。

このようにして見てくると、二つ目と三つ目の夢は連続性を持っていることが分かる。そしてこのことは人間が自然の営みの中の一部分であり、土に生まれ土に還る存在であることを端無くも表していると言えるだろう。そこでは人間も食物連鎖の中に組み込まれる。人間の遺体が動物達の餌食になることは、短編集『土に贖う』（二〇一九年）の「南北海鳥異聞」の中でも描かれており、ここに作者の冷徹な眼を感じとることができる。

『肉弾』で描かれるキミヤの三つの夢は作品の展開を予兆するばかりでなく、自然の中における人間の位置づけを明確に示したものと見えよう。

七

ヘリコプターが救助にやってくる。二晩経つても戻らなかったら救助要請をしてほしいと、父親は宿のオーナーに頼んでいたのであった。ヘリコプターの音に驚いた犬達は一斉に消え去った。キミヤはヘリコプターで運ばれようとするが、彼の脳裏にあったのは犬達のことであった。

そうだ、犬は。俺が生き延びる為に一緒に戦ったあの犬達は。この爆音で散り散りになった犬達はどうした。

「返せ、戻せ！俺は、俺はまだあそこに！」

「大丈夫です、大丈夫ですから落ち着いて下さい！荷物もお父様のことも、すべてきちんと回収しますから！」

看護師と、隊長らしき大柄な男が暴れるキミヤの体を押さえつける。後に残された父親の遺体を気にして暴れていると誤解していた。あれだけの熊禍だ、ショックを受けるのも無理からぬことだと、当然そう判断し、プロとして極力冷静に言い含めているようだった。

違うのだ。父親に対しての弔いはもう済んでいる。心を残しているのは犬達

のことだ。この異常な山で、戦い、生き延び、同じ獲物を食らい合った彼らのことだった。（「狗命尽きず」）

この若者は父親の遺体がある場に取り残されたことで暴れている、と救助隊は誤解した。だが、キミヤが気にしたのは今まで行動を共にし、熊と戦った犬達だった。「父親に対しての弔いはもう済んでいる」という一文があるが、熊の肝臓にかぶりつき、父の遺体に語りかけたことでキミヤは一応のケリをつけたつもりである。

犬達とは既に強い絆が生まれていた。それがヘリコプターの音によって急に引き裂かれてしまった現実を、キミヤはまだ受け止められないでいる。

この辺は、『颯風の王』の「第三部 颯風」の主人公であるひかりが、祖母の和子から暴風雨による崖崩れで花島に取り残された馬達の話聞き、その末裔が一度だけ残されている事実を知ってその馬に会いに行き、可能であればその馬を島から脱出させたいと願った状況と呼応する。ひかりからすれば、たとえ自然災害という不可抗力があつたにせよ、あれほど大切にしていた馬達を先祖が置き去りにした事実は罪深いものだった。自分達一族は〈裏切者〉であり、残された馬たちは〈被害者〉、という図式が定着したのである。こうなると今でも島にいる馬は憐れむべき対象にならざるを得ない。ひかりがこの末裔を救い出したいと考えるのは必然の流れであった。このため、彼女は年に一度だけその立ち入りを許されている自分の在籍する大学の馬研究会に自ら足を運び、馬との対面を実現させようとしたのである。果たして、実際に花島を訪れ対面した馬は憐みの対象だったであろうか。答えは否である。彼女が出会った馬はこちらの同情や共感を拒み、堂々とした姿で激しい風の中ですつくと立つ、まさに〈颯風の王〉だった。その姿を目の当たりにすることで、ひかりのそれまでの思いは雲散霧消した。この馬はこのままここで生き続けることがベストなのだ、とひかりは確信したのであった。

『肉弾』に話を戻そう。キミヤは引き裂かれた相手である犬達に思いを馳せている。果たして彼らをここから救い出し、再び人間の世界に戻すことが彼らの幸せなのだろうか。おそらくそうではあるまい。いくらかつて彼らが飼い犬であったとしても、彼らは既に野生化している。そしてそのような状況での生活の時間が積み重なってしまった段階では、彼らが人間の世界に戻ることじたいが土台無理な話なのだ。ラウダを初めとする犬達はこれからも摩周湖のカルデラの底で集

団を形成し、生き続けていくのだろう。

最後の章段「狗命尽きず」は、前述したように人間の視点から動物（犬）の視点に転換する。ヘリコプターが飛び去った後、視点はラウダに向けられる。

ラウダはふと、わずかにたなびくキミヤの匂いを強く感じ、鼻を鳴らして出処を探った。注意深く嗅ぎ分けていると、やがて一本の糸をたぐるように地面の何か所へと辿りつく。草に覆われた地面の一角から、確かに自分の同胞だった者の匂いがする。

視覚よりも嗅覚がそれを確認した。匂いは草の間に転がったその歯から発せられていた。あの非力な人間が熊に噛みついた際に折れ、血と共に残された小さな証。自分を屈服させた歯。あの人間の犬歯だった。

ラウダは新たな骨片をそっと啜えた。歩み去る彼女の後を、生き残った五頭の犬達は静かに追った。一頭とて、何一つ唸ることもなく、ごく静かにボストボスが啜えた遺物に付き従った。

（「狗命尽きず」）

このあと犬達が住み慣れたねぐらへと帰り、「残された者たちと共に、山が再び鼓動を始めた」の一文で作品は幕を閉じる。「遺物」である犬歯にはまだキミヤの匂いが強く残っている。犬達はいつまでもこの犬歯と共にキミヤの記憶を留めるのだろうか。それとも匂いがなくなるのと呼応するように、やがて彼らの記憶からキミヤは姿を消すのだろうか。読者の想像は留まることがない。だが、その一方で飼い犬たちの野生化という現実別の問題提起をしているのだ。